

各地で話題の病害虫

モモ枝折病

学名: *Fusicoccum* sp.

英名: Fusicoccum canker

平成3年頃から新潟県のモモ栽培地において灰星病の花腐れに似た症状及び果実被袋後の落果が発生し、農林水産省果樹試験場で、分離された病原菌を同定した結果、*Fusicoccum* sp.による枝折病であることが判明した。

本病は昭和25年頃神奈川県で初めて確認され、その後、静岡県でも発生が認められているが、新潟県での発生は初めてのことである。



新潟県園芸試験場 横山康裕氏提供

本病の病徴は、主に新梢の基部、腋芽に発生する。はじめ新梢の基部に褐色、油浸状の病斑を生じ病斑部からは褐色のヤニが漏出する。さらに病斑が広がると罹病枝は枯死し、折れて垂れ下がる。また、前年秋に腋芽が感染すると、翌春に芽や花が枯死する。果梗が侵されると早期に落果するが、果面に病斑が形成されることはほとんどない。

本菌は病患部に形成される柄子殻から柄胞子が飛散し、降雨後感染する。

防除対策としては、本菌は罹病枝とともに越冬することから、罹病枝を切除することが大切である。また、摘果や袋掛け作業などによる傷口からも感染しやすいので注意する必要がある。

リュウキュウミカンサビダニ

学名: *Phyllocoptruta citri* Soliman et

Abou-Awad

平成4年10月～11月にかけて奄美大島を中心としてポンカン、タンカンの果実にミカンサビダニによると思われる著しいさび果症状が認められた。わが国には従来から本虫の分布が認められていた。しかし、平成3年沖縄県で別種のリュウキュウミカンサビダニが報告されていたことから、被害果に寄生していたサビダニを千葉県農業試験場の上遠野富士夫氏が同定したところ、リュウキュウミ



沖縄県農業試験場 上原勝江氏提供

カンサビダニであることが確認された。

本種は沖縄県、エジプト、東南アジアに分布しており、タンカン、シークワーシャー、オウトウ、カーブチなどの中晩柑類や在来の柑橘類に寄生し、果実に著しいさび症状を引き起こす。また、温州ミカンにも寄生するが被害は少ない。

被害果の症状はミカンサビダニの被害果と酷似しており、はじめ果実の上部が淡褐色の小斑点となるが、しだいに果実表面が黒褐色となる。なお、いくぶんミカンサビダニの被害果より黒味が強い。

防除対策はミカンサビダニに準じて行う。また、薬剤散布は果実に被害が発現してからでは手遅れになるので予防散布を行う。

ウド萎縮病

Mycoplasma-like organism (MLO)

平成6年8月、群馬県吾妻郡吾妻町においてウドの株全体が発育不良となり、下葉が赤紫色を呈する症状が発生した。農林水産省農業研究センターマイコプラズマ研究室及び群馬県園芸試験場で診断した結果、ウド萎縮病であることが確認された。



群馬県病害虫防除所 漆原寿彦氏提供

本病は昭和56年に山梨県で初めて被害が確認され、新潟県においても確認されているが、群馬県での発生は初めてである。

病徴には、萎縮型及び心止り型がある。萎縮型の病徴は春から発生し、株全体が萎縮する。また、新葉は黄緑色となり、小葉化する。茎は30~40本も叢生し、茎の太さは健全株の1/3以下となる。心止り型の病徴は初夏から発生し、生育の途中で伸長が止まり、頂葉が黄化しやや萎縮して軽く巻き上がる。上位葉の基部に黄化した腋芽が叢生する。両型とも発病株の下葉は鮮やかな赤紫色を呈する。

本病はマイコプラズマ様微生物によって発病し、キマダラヒメヨコバイが媒介し、ウドの他にフキ、アスター、コスモス等にも感染する。

防除対策としては、他の株への感染を防ぐために発病株を抜き取り焼却することが重要である。

キタムギハモグリバエ (新称)

学名: *Chromatomyia fuscula* (Zetterstedt)

わが国には、従来からムギスジハモグリバエ (*Chromatomyia nigra*) が麦類の害虫として知られていた。しかし、過去に北海道内で採集された当該標本を北海道北見農業試験場で再検討した結果、標本はすべてキタムギハモグリバエ (*Chromatomyia fuscula*) であることが判明した。



北海道北見農業試験場 岩崎暁生氏提供

本種は、ヨーロッパ、カナダ等に分布し、麦類を含む多くのイネ科植物を加害する害虫である。

本種の幼虫は、寄主植物の葉にもぐり、線状の潜葉痕を形成して葉の中で蛹化する。

形態的な特徴としては全体的にムギスジハモグリバエに類似している。しかし、頭部の色彩及び複眼に生ずる微毛がまばら（複眼の数の1/2以下）である点で異なる。また、蛹（囲蛹）の前気門の形態に違いがある。

同属のナモグリバエにも類似していて肉眼での識別は困難であるが、ナモグリバエの寄主植物がマメ科・ウリ科・ナデシコ科などであるのに対し、キタムギハモグリバエ、ムギスジハモグリバエはイネ科に限られている。

今回再検討された標本にはムギスジハモグリバエが含まれていなかったが、本種の北海道における分布の有無については今後の調査が待たれる。